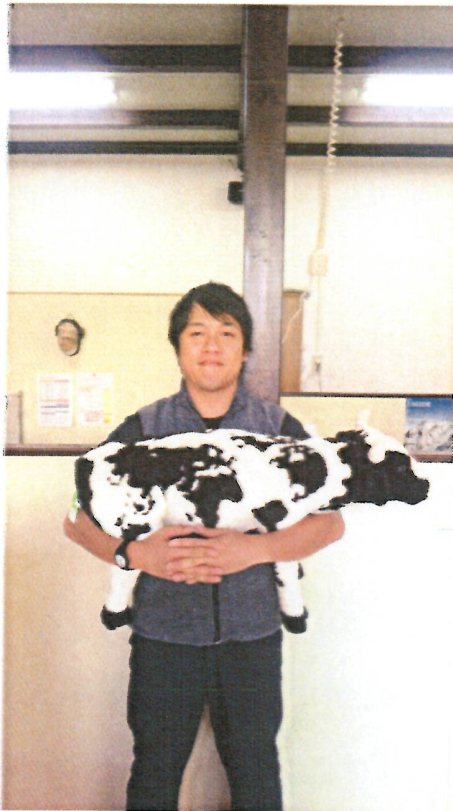


皆様、はじめまして。2016 年 4 月に(株)トータルハードマネジメントサービス (THMS)の獣医師として入社いたしました岩澤裕介(イワサユウスケ)と申します。よろしくお願い致します。大変恐縮ではありますが、この場をお借りして自己紹介させていただきたいと思います。



すでにご存知の方もいらっしゃると思いますが、現在 30 歳で獣医師 1 年目です（奥先生、住谷先生と同一年です）。新潟県の田舎に生まれ、両親は酪農家ではなく、サラリーマンでした。高校を卒業後、理系の大学に進学しましたが、偶然出会った獣医師の仕事を見て刺激を受け、獣医師になるために再受験し、2010 年に帯広畜産大学に入学しました。そして大学時代には THMS で 2 度の実習をさせていただきました。実習の時には多くの酪農家の皆様から「THMS の仕事は厳しい、就職はよく考えたほうがいい」とのアドバイスを頂戴しましたが、熟慮に熟慮を重ねた結果、THMS への就職を希望し、採用していただきました。

未熟者ではありますが、目の前のことを一つ一つ積み重ねて、皆様のお役に立てるような獣医師になりたいと思っております。昨年・一昨年と比較するとフレッシュさに欠ける新人ですが、よろしくお願い致します。

Yusuke IWASAWA

研究と現場を繋ぐことの重要性

昨年度まで私が在学していた帯広畜産大学では農畜産業に関係した様々な研究が進められています。「研究」というと難解で、とっつきにくい印象ですが、今回は大学での研究と現場との関わりについて私の経験をもとに書いてみようと思います。

私は「家畜病理学」という研究室に所属していました。病理学とは病気の原因を調べる学問です。最近ではドラマ「フラジャイル」が放送されていましたが、あのドラマはヒトの病院の病理学教室が舞台でした。

ここからは、ウシの病気の研究の流れの一例についてです。帯広畜産大学には主に十勝管内で見つかった病気の原因がはっきりとしないウシが運ばれてきます。大学に搬入されたウシは、身体検査、血液検査、X線検査など詳細な検査が行われます。その後、動物倫理の基準に則って安楽殺され、病理解剖に供されます。ここからが私の所属していた研究室の出番です。病理解剖では身体検査を元にして、身体の中の臓器を肉眼的に検査し、どこに異常があったのかを調べ、異常が見られた箇所を採材します。採材された臓器は、顕微鏡を使って組織レベル、細胞レベル、場合によっては遺伝子検査などが行われ、最終的に診断されます。これらの検査結果は、担当獣医師を通して農家さんにフィードバックされ、その後の対応に役立てられます。さらに、大学で集められたデータは解析され、病気の原因の解明や治療法・予防法の開発へと繋がります。実際は多様な研究が様々なアプローチから勧められているので、上記はあくまで一つの例と考えてください。

これら最新の研究の情報は様々なメディアで発表されています。THMSの先生方は常にこれらの情報にアンテナを張っており、莫大な情報の中からこの地域の酪農家の皆さんにとって有益な情報を探しています。国内・国外を問わず、研究によって得られた情報を調べ、それを酪農家の皆さんにフィードバックすることも我々の重要な仕事だと思います。先日開催された育種改良セミナーやこのマネジメント情報が、まさにそれに当てはまるのではないのでしょうか。今後は私もアンテナをもっと広げ様々な情報を提供できるようにしていきたいと思っています。

Yusuke IWASAWA